

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別授受認可第百六二七号
明治三十二年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
平成二十年七月一日発行(第四百十一卷第七号)

ホトトギス

七月号



俳句随想〔三百十三〕

汀子

東京滞在中に私は小沢昭一さんの舞台のお誘いを受け、今井千鶴子さんと新宿の紀伊國屋ホールへ行った。「当日券はないのでしょうか？」と来る人も居て係の人に聞いているが、満席だと断られて諦めて帰って行く。私は小沢昭一さんとはNHKの番組で一緒に縁で東京の私の句会に時々参加して下さる。私と同年代を生きて来られた方として彼の考え方にはいつも共感を覚える。

「小沢昭一歌のステージ唄って語って僕のハーモニカ昭和史」私達が座席に坐ると次々席は埋まり満席になった。ピアノと音楽の伴奏の中一人で一時間三十分余りの舞台である。

始まると観客も舞台と一体になり彼の話や歌に笑いが止まらない面白さ、可笑しさ、それも一言一言に温かい心を感じ笑いが止まらないかと思うとぐっと涙がこみ上げて来る。一時間三十分は瞬く間に過ぎ、終わった後は何とも言えず満ち足りたものが胸に溢れた。

私は思わず叫びそうになった。「小沢昭一さんが日本の総理大臣になられたら、日本はみんな幸せになれるかも知れない」小沢昭一さんご縁を頂いたのも俳句なのである。

旬日記

汀子

平成十九年七月一日 関西野分会

梅雨晴の一日 祝ぎの心もて
稿債に向かひて 梅雨の日々を処す
七月一日 下萌旬会

海開ありし昔の芦屋浜
目上げて正面の虹見とどけぬ
海開神事の声と波の音
梅雨晴の今日も祝ぎの日よりつづく
七月二日 ロイヤル俳壇

眠る葉をしたらがへ合歡の花夕べ
合歡咲けば三瓶の旅路近づけて
どこまでもついて行きたく道をし
道をしへより知つてゐる山路かな
夕立に濡れることなく着きし宿
七月七日 芦屋ホトギス会

造り滝には一工夫二工夫
夏霧の六甲隠す日は雨に
七月十日 大阪倶楽部

月見草三瓶の闇を深うせり
降りつることなく止みて露涼し
誰がために闇に花咲く月見草
山荘の夏炬に客のある立ちかな
雷の予報ばかりが先立ちな
岳麓の森の歳月月見草
七月十日 綿葉倶楽部

水無月のはかりごとめく山家かな
やうやくに駐車出来たる汗の引く
水無月や姑の忌日のめぐり来し
汗の顔信じるほかのなかりけり
七月十一日 清交社

虹を見る日々の忙しさかこちつ

正面に立てば隠る虹の脚
虹消えし旅の大地と見ること
見しことのなき鳥蟬をくはへみし
降るのを承知の梅雨の旅となる
七月十三日 工業倶楽部

花莫塵のしみに回顧のありにけり
色少しあせ花ござにある歴史
青甲吹く夏風抜けてゆく力
七月十四日 石見ホトギス俳句大会前日旬会

濡るとも梅雨の草原行きて句碑
星々を来し台風に処す旅路
七月十五日 石見ホトギス俳句大会
山夕焼西の方角分りける
遠ざけし台風山の星現る
七月十七日 有恒倶楽部

計画の一度は立ちぬ宵祭
たちまちに汗の締切日となり
ハンモック風の葉擦れの夕べかな
一日は毛虫退治に庭師来る
又地震のありしと梅雨の電話切れ
本当地は祇園祭を見て京
大空の風を集めてハンモック
七月十七日 無名会

梅雨明けしとも明けぬとも空仰ぐ
条件の揃ひたるより虹探す
梅雨明の待たる旅でありしかな
地震のこと梅雨の会話に加はりぬ
虹消えて残像のなほある如く
目を上げて虹の方角正しけり
梅雨明をせかして山の風荒る
七月十八日 夏潮旬会

消息を問ふも語るも露涼し

月見草三瓶の旅を語らば
雷を呼ぶ雷神山といふ難所
梅雨雲の切れて星見しことも旅
七月二十一日 東北ホトギス俳句大会前日旬会

みちのくの青葉に染まりゆくことも
降りつることなく止みて梅雨の旅
七月二十二日 東北ホトギス俳句大会

引く汗もみちのく遊の物の旅衣
仙台は虚子の曾遊地明易し
雨の糸万緑光り止まざりし
七月二十六日 きさらぎ会

羅に包まれしより風の
滝音を合はせし会話ありにけり
羅を着て着瘦せかとなりぬ滝の径
これより上りふり返る滝となる
音消えてよりふり返る滝となる
七月二十七日 時雨旬会

七月の夜空に期待持ちて発つ
青田には風の方角ありにけり
雨避くる智恵ある如く蟻地獄
ひそみぬしとは思はれぬ蟻地獄
からつばの蟻地獄とありぬ旅衣
七月の東京へ発つ旅
いさぎよきとも七月の太陽よ
七月二十八日 野分会

鮮桶を出して来客十五人
梅雨明の待たる晴でありにけり
汗引きて汗を忘れ暮らしあり
七月二十九日 関西伝統俳句支部

景色なき世の城華麗汗涼しめ
戦なき世の城華麗汗涼しめ
木々になくさざめく水面風涼し
七月二十九日 滝廣様

悲しみの深き朝の蟬時雨

廣太郎句帳

廣太郎

平成十九年七月二日 一水会

大川の濁り川鵜か白雨か
夏座敷虚子在せしはこの辺り

七月五日 蕉心会

水無月の豪雨を溜めし水の嵩
雨降つて止んで日差や半夏生
汗かいてでも食べたいもんをまんねん
蕉翁像今日は円座が欲しからう
水音をモーターボート掻き消して
影置かぬ時涼風の生れくる
川端は句作ジョギング三尺寝
泳ぎたくなるこの水辺この日差
七月七日 あうたう句会
青田風より陸奥の香を纏ひ
白南風となる安達太良の辺りより
草笛のつもりあなたのホイッスル
七月九日 朝日カルチャー若草旬会
金魚の尾冷たく燃えてをりにけり

猫の手を逃れ金魚の成長す
見る子皆金魚の口になつてをり
金魚ゆらゆらと吾子の目きらきらと

七月十二日 土筆会

髪洗ひあなたとの過去消してゆく
雲の峰富嶽と対峙してをりぬ
俳磚を隠し切れざる合飲の花

七月十三日 浜田吟行会

五月雨を囁しくぐもる鳶の笛
登山めく城山今日は仰ぐのみ
蚊を潰すことに始まる句作かな

蚊に食はれますよ私は大丈夫
仇討を涼しく語る碑でありし
七月十四、十五日 石見ホトギス俳句大会

錆色を地に還しつつ沙羅落花
北の原五月雨西の原嵐
台風に明かされてゆく星いくつ
七月十七日 草木瓜会

水虫をうつせしは君いやあなた
秋近き地震の一報ありにけり
あの佳人実は水虫てふ噂
川伸びて山膨んで秋近し
日の本の里に都会に秋近し
人間も河馬も麒麟も秋を待つ
七月十九日 登高会
神の業とも三瓶野の大夕焼

沙羅の花散り初めしより一会かな
夕焼に淋しく暮れてゆく三瓶
夕焼に富士の輪郭整へり
北の原西の原夕焼に消ゆ

七月二十一、二十二日 東北ホトギス俳句大会

一瀑を離し鶯老を鳴く
みちのくの夏やあなたはもう居ない
紫陽花を抜けあぢさみを抜け溪へ
岩といふ神の造化や露涼し

七月二十四日 若水句会

昨夜観世今宵金春袴能
ビール干す下戸には下戸の作法かな
乾杯のビールに話長過ぎる
空蟬の目にまだ命あるやうな
空蟬の命を風に移しけり
袴能てふ表情にシテ出づる

七月二十五日 目黒学園句会

炎帝に高層ビルの従へり
打水も味のうちなる老舗かな
炎帝の統べて都心といふ脆さ
打水に夕日は色を変へてをり

七月二十五日 百夜句会

句会組観劇組に明易し
螢の一通の恋といふは白
白南風や原色のビル置く都心
風通す言霊通す網戸かな

雑詠

廣太郎 選

初桜待たるゝ窓に顔よせて	福岡	松尾緑富
手にかかるき春雨傘を選び来て	同	
我が町の名所の一つ花の山	同	
春の夜の呼吸器の音あるばかり	山形	西澤さち女
臨終の夫を看取りておぼろの夜	同	
悲しみの吾に春月惜しみなく	同	
海峡を越えてくるものみんな春	八尾	岩垣子鹿
下萌やひかりはじめし何もかも	同	
句碑披く百万石の春風に	同	
どか雪を卸す二月も末てふに	長岡	安原 葉
蕾とは紅より白の目立つ梅	同	
咲かんとす花の氣息に包まれて	同	
一と筋のまなざし遙か内裏雛	樞原	稲岡 長
古ゆいのちつなぎて土筆長け	同	
つくしんぼ生ふるにまかせ藤原京	同	
大地にも通へる血潮寒椿	神戸	山田弘子
立春と言ひて哀しみには触れず	同	
残り香のやうな言葉や梅開く	同	

藪の黙破り雪折竹どつと	福知山	吉田節子
渾身の力及ばず雪折す	同	
雪折の命のあかし掌に残る	同	
水なのか白魚なのか水なのか	東京	内藤呈念
白魚の包みかくさぬ命かな	同	
見物衆しびれを切らす白魚網	同	
溜息はこんな色かも桜貝	神戸	後藤立夫
穴を出てすぐに地虫と言はれても	同	
驚いたやうに風船割れにけり	同	
春山に紅白童女侍らせて	東村山	村松紅花
春山や政子実朝虚子眠り	同	
春山に曾良隠れ棲みたりし岩	同	
大とんど平家をしのぶ炎とも	福山	竹下陶子
冴返る水の惑星とはなりぬ	同	
女郎塚の昔をかたる法師蟬	同	
老人ホームバスは奥まで梅林	熱海	嶋田一步
鶯笛売る店三時半に閉づ	同	
閉づる日は決つてゐずと梅見茶屋	同	
啓蟄の庭へ鳶の輪降りてくる	同	
子のために吹き母たのし石鹼玉	嶋田摩耶子	
それつきりなる逝きし友日脚のふ	同	
山水は走り新年走り出す	熊本	岩岡中正
ワイングラス二つ並んで春隣	同	
胸中に詩ポケットに桜貝	同	

雑詠句評（六月号より）

雅　・ 昭代・暮潮
仁　義・比奈夫・純也
くに彦・弘子・しげ人
一　歩・廣太郎

ハローてふ起床案内の初電話　神戸　千原叡子

電話のベルで眼が覚めた。突然「ハロー」である。海外旅行で、モーニングコールを頼んでおいたことに気がつくのに、すこし時間がかかった。そうだそうだ、日本じゃない。我が家じゃない。新年だ、色んなことが一度に理解出来て、すっかり眼が覚め、清しい新年の朝を迎えられたことでしょう。まさしく新年早々の電話の電話のめでたさも、海外旅行ならではの華やかさのなかに、晴れやかに伝わってくる。（雅）

一見して、新年に海外旅行をされている情景が見て取れる。ホテルの部屋でモーニングコールが鳴った。図らずも丁度新年最初

に受けた電話となった。普通「初電話」というのは、遠くにいる家族などとのそれが多いだろうが、何ともユニークな視点で季題を捉えている。（廣太郎）

御慶ごと運ばれてゐる昇降機　神戸　山田弘子

着想が面白い。新年の顔合せであろうかホテルの高階へと乗り合わせたエレベーターの中で、窮屈な姿勢のまま御慶を述べ合っている人達。それにはお構い無く上昇するエレベーター。

「御慶ごと運ばれて」という発想、狭いボックスの中に凝縮された人間の営みが、門外漢の筆者の目を鼻降する思いである。斬新な着眼に脱帽。（昭代）

最近は多くの場所にエレベーターが設置されており、この句も色々な場所が想像出来る。初仕事での会社のエレベーターの中の会話か、自宅マンションで新年に出会った人との会話か。何れにせよ新年初めて会って「御慶」を述べている姿が、この狭い空間を通して明るく語られている。（廣太郎）

天地有情

品川の雑踏もまた昭和の日	富士よりも低き夕日や昭和の日	後苑の猪の荒れやう見たくなし	暖冬にSLOWLIFEの余生あり	空濡れて二月の富士の明らかに	二月尽ただ旅ひとつしたるのみ	二ヶ月の祝竹垣も新しく	虚子館に溢るる祝の人ぬくし	雪女都心に白き贈り物	孟派ワイングラス派年酒酌む	我既に幽明にあり春百寿	快晴と吹雪が交互する世相	暁に浮かびて白し庭桜	片々と花こぼれゐて静かな	明るさを窓に見てをり春の雨	いまだ見ぬ吉野の花はいかがかと	明日春となりゆく雨の光かな	一滴の雪解より山胎動す
福山	同	たつの	同	東京	同	長岡	同	東京	同	豊中	同	樺原	同	福岡	同	神戸	同
竹下陶子	浅井青陽子	今井千鶴子	安原 葉	稲畑廣太郎	青佳	稲岡 長	松尾緑富	長山あや									

酔早し雪の降る夜のあられ酒	あやふやさありたる梅の花だより	ほむらなき心に眺むどんどの火	傘寿 吾の王道 榮土 寒 椿	まだ風を知らぬあけぼのいろの梅	鍵善に夫と落合ひ二の替	あたたく吾を見守りゐる遺影	臨終の床に春の夜明けてきし	干してゐて明日も海苔を採ると言ふ	海苔干場できし広さに子等遊ぶ	はぐれたる友と出会へて梅見茶屋	梅見茶屋おでこに日差し受くる席	石狩はポプラの多し雪白し	元旦のポプラ直立不動なる	一樹より春禽のこぼれんばかり	踏青の二三歩に旅人となる	静けさに気付きたるとき春の雪	朧夜の電波時計と電子辞書
同	同	徳島	同	神戸	同	山形	同	熱海	同	同	同	札幌	同	熊本	同	八尾	同
後藤比奈夫	上崎暮潮	山田弘子	西澤さち女	嶋田 一步	嶋田摩耶子	山下タミ	岩岡中正	岩垣子鹿									

子選

天地有情句評

汀子

第一回虚子生誕記念俳句大会の成功を季題が語る。

雪女都心に白き贈り物 東京 稲畑廣太郎

白一色の雪に覆われた東京を雪女の贈り物と見た感性。

我既に幽明にあり春百寿 豊中 瀧 青佳

百歳の春の自らを思う叡知。

暁に浮かびて白し庭桜 樫原 稲岡 長

昼間見ていた庭の桜が幻想的に白く浮かんで見える早暁。

いまだ見ぬ吉野の花はいかがかと 福岡 松尾緑富

桜の名所の一つである吉野山に心を寄せる作者。

明日春となりゆく雨の光かな 神戸 長山あや

明日が立春という日の雨までなにか明るいのである。

品川の雑踏もまた昭和の日 福山 竹下陶子

四月二十九日は昭和天皇誕生日である。昭和の日として定着す

る祝日は雑踏の品川であった。

暖冬にSLOW LIFEの余生あり たつの 浅井青陽子

余生を楽にゆつくり過ごすのが長寿の秘訣。暖冬も味方する。

二月尽ただ旅ひとつしたるのみ 東京 今井千鶴子

二月を振り返って見る作者。一つの旅をその月に印象つけた。

虚子館に溢るる祝の人ぬくし 長岡 安原 葉

(以下略)